様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：８２７２０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３５７

研究課題名（和文）鎌倉期における南都仏教の展開―寺院間の華厳教学活動から見た―

研究課題名（英文）Development of Nanto Buddhism in Kamakura period ; From the viewpoint of study activity of Kegon Buddhism among the temples

研究代表者
三輪　眞嗣（Miwa, Shinji）

神奈川県立金沢文庫・学芸課・学芸員

研究者番号：３０８２９２９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に鎌倉期において、南都寺院とその周辺寺院の間で展開した顕教教学の修学活動を、学侶と律僧による華厳教学活動を事例として解明した。南都における華厳教学の中心である東大寺尊勝院、南都の周辺での拠点となった寺院として、久米田寺や神護寺を取り上げ、これまでほとんど寺院史的視点からの検討が進んでいなかったこれらの寺院における僧侶のあり方を、修学活動という僧侶の本質的な活動に即して明らかにした。本研究で見えてきた、南都寺院とその周辺寺院で形成された華厳教学の修学環境は、中世南都仏教が称名寺などの東国寺院へ波及し、中世東国仏教として展開していく歴史的前提といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
鎌倉時代は浄土・法華・禅・律など新興の仏教教団が形成される一方、主流の顕密仏教も様々な展開を見みせる時代であった。奈良（南都）では顕教教学が盛んに学ばれており、なかでも華厳教学は鎌倉を中心とする東国社会にも広がり、新たな展開を見せた。
本研究では、鎌倉時代における華厳教学の展開を可能にした基盤として、これまではあまり注目されてこなかった寺院のネットワークや僧侶の教学的な交流の様相を明らかにした。主要な検討対象として、華厳教学の中核的拠点である東大寺尊勝院、京都における拠点である高山寺・神護寺、地方での拠点である和泉国久米田寺を取り上げ、これらの寺院間で形成された華厳教学の修学環境を解明した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I tried to clarify the development of Kengyo Buddhism at Nanto temples and its surroundings temples in Kamakura period, through the case of Kegon Buddhism studied by Gakuryo and Ritusou in medieval Japan. There was few research on the temples as the spot to study Kegon Buddhism, Sonshouin at Todaiji temple, Kumedadera temple and Jingoji temple, so I focused on monk's essential activity of studying Buddhism and investigated the aspects of the study of Kegon Buddhism in these temples. As a result, it is historical condition that Nanto Buddhism was introduced into the temples at the Kanto district such as Syomyoji temple that the surrounding to study developed on the Nanto temples and its surrounding temples.

研究分野：日本中世史

キーワード：東大寺　尊勝院　華厳　久米田寺　神護寺　称名寺　東国　律僧

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

顕密体制論・寺社勢力論が提起されて以降〔黒田俊雄「中世寺社勢力論」(『黒田俊雄著作集』第三巻、法藏館、1995 年、初出 1975 年)、同「中世における顕密体制の展開」(『黒田俊雄著作集』第二巻、法藏館、1994 年、初出 1975 年)〕、個別の権門寺院が蓄積されてきた。各寺院の個別研究を総合する視角として、朝廷による宗教政策論が挙げられる〔上島享『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、2010 年〕。宗教政策論では、国家的法会の整備により、寺院での修学を促進しつつ、公請の停止によって寺僧の統制を図ったことが示され、これにより各寺院での修学促進と寺院大衆の統制を統一的に把握することが可能になった。しかし、これらの研究は基本的に平安院政期の事例によって進められてきたため、鎌倉期の教学の展開、とくに顕教教学に対する評価が不明確という問題がある。

鎌倉期には、朝廷と並んで幕府のもとでも密教僧による修法・祈祷が盛んにおこなわれる一方、その社会的活動が注目されてきた叡尊・忍性を代表とする律僧も、極楽寺や称名寺で教学活動を展開しており、称名寺の本如房湛睿に代表されるように多くの律僧が華厳などの顕教教学の修学に打ち込んでいた。東国寺院に伝来した代表的な聖教群である「称名寺聖教」をみると、顕教聖教のなかでは華厳教学に関する著作が量的に際立っている〔納富常天『金沢文庫資料の研究』法藏館、1982 年〕。しかし、南都仏教の一つで、顕教である華厳教学がなぜ鎌倉とその周辺で学ばれていたのか、という問いを立てた際に、平安院政期の事例を基盤とした宗教政策論には明確な答えを求めえない。朝廷が整備した南京三会のような、僧侶社会の出世と修学促進を結びつける論義法会の体系が存在しなかった鎌倉幕府のもとでは、そうした法会体系の整備・編成とは別次元で、律僧の自発的な修学の関心に基づいて華厳教学が進展していたと予想される。そのため、南都仏教の内在的な展開のなかに東国での顕教教学やそれを支えた寺院を位置づけねばならないのである。

一方、仏教学の分野では、華厳宗の本所である東大寺尊勝院と、律僧による復興を遂げた戒壇院、明恵に始まる高山寺の三流に分けて、鎌倉期の華厳教学を把握している〔藤丸要・野呂靖・大谷由香・中西俊英「鎌倉期の東大寺とその周辺」(『佛教文化研究所紀要』53、2015 年)〕。三者の教学的特徴を捉えている点で、分類としては説得力がある。ただし、実際には仁和寺華厳院、久米田寺、海印寺といった畿内寺院でも華厳教学が広く学ばれていたのであり、したがってその全体像を描き出した上で、個々の寺院の特徴を論じ直す必要がある。また、近年では、湛睿のように久米田寺や戒壇院で学んだ僧侶と東大寺尊勝院との教学的交流の実態が急速に解明されつつある。東大寺（尊勝院・戒壇院）に、久米田寺に高山寺などの諸寺院を加えた寺院間交流の実態を、仏教学の成果に学びつつ、歴史学においても検討を進める段階に入っている。

こうした問題点や研究状況を前提として、歴史学と仏教学やその他の関連分野との連携を目指すためにも、畿内地域における華厳教学の展開を歴史的に跡付け、その全体像を示した上で尊勝院を中心に、南都周辺寺院の位置づけを改めておこなうことが求められる。さらに、そうした畿内における寺院間での修学環境が、東国での華厳教学の広まりにどのように作用したのかを解明することも求められる。

２．研究の目的

上述の研究状況を踏まえ、本研究では、鎌倉期以降の南都仏教の展開を、尊勝院や南都の周辺

寺院間における華厳教学の修学活動を具体的な事例として解明することを主目的とした。現在の研究段階では、個別の寺院における華厳教学修学の事実は指摘されているが、それらがどのように有機的に結びついて展開していったのか、教学活動の広まりの全体像が描き出すにはいたっていないと考える。南都を中心とした畿内の寺院ネットワークを視野に入れ、その担い手である個々の僧侶の修学活動を検討することで、個々の寺院単位で進められてきた調査・研究を総合し、一定の寺院ネットワークの姿を描き出すことができる。

歴史学だけでなく、仏教学、国文学、国語学など隣接する各研究分野では、寺院の聖教調査が大きく進展し、寺院ごとの史料群の特色が論じられ、寺院ネットワークの存在が多く指摘されてきた。これらを横断的に見渡すことで、寺院という点と、それらを結ぶ線に加え、尊勝院を核に、久米田寺、高山寺、神護寺といった中核になる寺院を明示的に布置することで、「面」として南都仏教の展開を把握することを目指した。

かかる作業をおこなった上で、畿内で成立した寺院ネットワークにおける華厳教学の修学環境が、東国への華厳教学の波及に果たした役割を明らかにする。すなわち中世東国仏教の形成過程と特質を論じる前提作業とすることを本研究の二次的な目的とした。

３．研究の方法

本研究では、上記の目的に沿って以下の課題と方法を設定し、研究を遂行した。

（１）鎌倉期の東大寺尊勝院の基礎的研究

鎌倉期における南都仏教、とくに華厳教学の中心であったのは、華厳宗の本所・尊勝院である。そこで本研究では、尊勝院に関する基礎的研究、すなわち研究の集中している宗性・弁暁以外の院主の検討、同院で活動し教学活動を担っていた学侶の事績の検討をおこなった。基本的な研究方法として、刊本史料集や個別の史料紹介が多く比較的利用しやすい、「東大寺文書」を始めとする古文書や古記録に加え、東大寺伝来の聖教群のうち華厳教学関係の聖教にも注目し、その読解・分析をおこなった。

（２）南都周辺寺院の研究

鎌倉期には、神護寺・高山寺・仁和寺といった京都近郊寺院や和泉国久米田寺などの地方寺院で華厳教学が展開していた。そこで、（１）の研究と並行して、東大寺外の寺院を南都周辺寺院と位置づけて、その華厳教学活動の様相を解明した。特に本研究では、東大寺や高山寺といった寺院に比べて、研究の立ち遅れている久米田寺を中心に取り上げ、南都仏教が地方へ展開していく様相を明らかにした。

久米田寺は「久米田寺文書」などの文書群や寺院縁起が伝来し、ほとんどの史料の翻刻がなされているが、本研究では他の寺院・史料機関が所蔵する久米田寺関係史料を網羅的に収集・分析することにより、鎌倉期久米田寺の基礎的な事実を明らかにした。なかでも称名寺や多和文庫（香川県）に伝来した久米田寺関係の未検討史料を分析し、その関連文書や聖教と合わせて検討することで、ほとんど研究の進められていなかった久米田寺の律僧集団の基礎的な考察をおこった。

次に、明恵やその同法集団を介して東大寺と華厳教学を通じた交流のあった神護寺・高山寺を対象とする検討をおこなった。両寺院とも良質な史料集が刊行されているため、それを用いて分析をおこなった。研究蓄積の厚い高山寺に比べ、神護寺は寺院史的観点からの研究に乏しいため、

本研究では神護寺の検討に注力し、鎌倉前期の神護寺の寺院経営を担った僧侶や、鎌倉後期に同寺に出入りしつつ関東の律院でも修学・修行を積んでいった律僧の存在を検出した。

（３）東国における南都仏教の展開について

上記（１）（２）の基礎的研究によって畿内寺院における華厳教学の修学環境を明らかにした上で、南都・京都や畿内地域で展開した華厳教学がどのように東国に伝わっていったのかを検討した。その際、書写・収集した聖教が大量に伝来し、かつ関連する紙背文書も豊富な、本如房湛睿に注目した。湛睿は称名寺や極楽寺などで活動しつつ、久米田寺や東大寺に留学し、華厳教学の研鑽に努め、その後称名寺や下総国東禅寺などで活動し、最終的に称名寺の第三代長老となった。湛睿の畿内留学時における教学的交流が、その後称名寺を始めとする東国の律院でどのように展開したのかを、「称名寺聖教」や東大寺伝来の聖教群の検討を通じて考察した。

４．研究成果

上述の研究方法（１）～（３）に即して本研究での主要な成果を整理する。

（１）鎌倉期の東大寺尊勝院の基礎的研究

東大寺尊勝院については、大量の聖教を遺した宗性や唱導史料の写本が伝来している弁暁に関する研究蓄積がある一方、その他の院主や同院で活動した学侶に関する研究は十分ではない。そこで本研究では、東大寺図書館に所蔵される論義日記を活用し、鎌倉期に同院で開催されていた華厳経探玄記三十講という法会の基礎的な検討をおこない、尊勝院の学侶の教学活動の様相を明らかにした〔三輪眞嗣「中世前期東大寺の修学振興と学侶」(『洛北史学』22、2020 年)〕。

尊勝院主については、宗性以降の尊勝院主として史料上に登場する公暁について、仁和寺華厳院との関係などいくつかの事実を指摘した〔三輪眞嗣「和泉国久米田寺の律僧集団についての予備的考察」(『金沢文庫研究』344、2020 年)〕。また、南北朝期から室町期までの尊勝院・同院主についても検討を進め、尊勝院を東大寺全体の寺院構造のなかに位置付けることを試みた。これについては、東大寺全体の寺院構造に関する研究の一環として、口頭報告をおこなった〔三輪眞嗣「応永・永享期における東大寺の惣寺と院家」(『応永・永享期文化論研究会』2020 年)〕。

（２）南都周辺寺院の研究

鎌倉期における華厳教学が展開した南都周辺寺院として、久米田寺、神護寺、高山寺などに注目した。

まず久米田寺については、称名寺や多和文庫に伝来した未検討史料を用いながら、久米田寺と東大寺、さらには称名寺を始めとする関東諸寺院などに出入りした律僧集団の基礎的研究をおこない、これまでほとんど研究がなされていなかった久米田寺の律僧集団のすがたを明らかにした（三輪眞嗣「和泉国久米田寺の律僧集団についての予備的考察」)。また、鎌倉期における久米田寺と東大寺尊勝院との人的交流やそれを可能とした拠点寺院としての律院の展開について、（２）の総括として最終年度に口頭報告をおこなった〔三輪眞嗣「鎌倉中後期における律院の展開―久米田寺と東大寺に注目して―」(『佛教史學会第 72 回学術大会』2022 年 11 月)〕。

京都近郊寺院で華厳教学が展開した寺院として神護寺・高山寺についても、主に刊本史料から検討を進めた。鎌倉前期に同寺院の経営に携わった僧侶・覚厳や、鎌倉後期に神護寺に入り、称名寺や極楽寺など関東律院を往来した僧侶・全海に注目し、その基礎的考察をおこなった〔三輪

眞嗣「覚厳小考―鎌倉前期における神護寺・高山寺造営の一齣―」(『年報中世史研究』47、2022年)、同「一乗房全海に関する一考察―神護寺と称名寺での動向を中心に―」(『金沢文庫研究』350、2023年)〕。とくに全海は称名寺の湛睿に自身の書写・収集した華厳教学関係の聖教を含めた蔵書群を譲ったと推測され、両者の関係は南都仏教から東国仏教への展開を見る上で重要と判断される。

（３）東国における南都仏教の展開について

本研究の当初の計画では、久米田寺や東大寺に留学していた本如房湛睿を事例として、彼の留学期の動向や教学上の交流を検討し、東国へ華厳教学が展開していく過程を分析することで、鎌倉期の東国における南都仏教の展開の特質を解明することを目指した。しかし時間的な制約や後述の史料調査の制限などから、湛睿自身の本格的な検討までには至らなかった。しかし、①②の研究を進めるなかで、湛睿と密接な交流を持った久米田寺僧や、一乗房全海といった蔵書の貸借をおこなっていた僧侶の検討をおこない、畿内と関東を往来する僧侶の層の厚さを捉えることができた。

本研究を遂行した結果、（１）（２）の方法に即した成果に偏ってはいるが、（２）の口頭報告や、本研究の成果に関連する展覧会の準備過程において、（３）東国における南都仏教の展開について一定の見通しを得ることができたため、中世東国仏教を論じるための前提作業という本研究の二次的な目的も一定程度果たすことができた。なお、2020 年度以降は、新型コロナウイルス感染症の全国的拡大により、遠方での史料調査の計画に大きな変更を余儀なくされた。紙焼き写真の購入等で対応したが、本研究を遂行するのに十分な調査ができたとはいいがたい。そうした制約があったものの、尊勝院や久米田寺、神護寺等の教学活動や僧侶の活動についての解明を一定程度進めることができ、（３）の展望も得られた点は本研究の成果といえる。

本研究での史料調査・分析で得られた知見や未紹介史料については、一部を研究論文・史料紹介・担当展覧会図録の形で公表したが〔三輪眞嗣「御灌頂次第 仁治禅定殿下」(『金沢文庫研究』345・346、2021年)、堀川康史・三輪眞嗣「延文五年桂宮院伝法灌頂私記・同紙背文書」(『東京大学史料編纂所紀要』32、2022年)、三輪眞嗣「近世称名寺の寺僧集団に関する基礎的考察」(『金沢文庫研究』348、2022年)、神奈川県立金沢文庫編『法会への招待』(神奈川県立金沢文庫、2022年)〕、未公表の知見・史料もあるため、今後、研究論文・史料紹介・展覧会図録などの形で公表することを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 堀川康史　三輪眞嗣	４．巻 32
２．論文標題 延文五年桂宮院伝法灌頂私記・同紙背文書	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	６．最初と最後の頁 106‐121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三輪眞嗣	４．巻 348
２．論文標題 近世称名寺の寺僧集団に関する基礎的考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 金沢文庫研究	６．最初と最後の頁 17‐44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三輪眞嗣	４．巻 22
２．論文標題 中世前期東大寺の修学振興と学侶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 洛北史学	６．最初と最後の頁 21‐46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三輪眞嗣	４．巻 345・346
２．論文標題 『御灌頂次第　仁治禅定殿下』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 金沢文庫研究	６．最初と最後の頁 47‐67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三輪眞嗣	4．巻 344
2．論文標題 和泉国久米田寺の律僧集団についての予備的考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 金沢文庫研究	6．最初と最後の頁 34－49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三輪眞嗣	4．巻 47
2．論文標題 覚厳小考―鎌倉前期における神護寺・高山寺造営の一齣―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 年報中世史研究	6．最初と最後の頁 75－99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三輪眞嗣	4．巻 350
2．論文標題 一乗房全海に関する一考察―神護寺と称名寺での動向を中心に―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 金沢文庫研究	6．最初と最後の頁 16－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 三輪眞嗣
2．発表標題 応永・永享期における東大寺の惣寺と院家
3．学会等名 応永・永享期文化論研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

１．発表者名 三輪眞嗣
２．発表標題 鎌倉中後期における律院の展開―久米田寺と東大寺に注目して―
３．学会等名 佛教史學会第72回学術大会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 神奈川県立金沢文庫	４．発行年 2022年
２．出版社 神奈川県立金沢文庫	５．総ページ数 116
３．書名 特別展 法会への招待―「称名寺聖教・金沢文庫文書」から読み解く中世寺院の法会―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関